

LECS without injection にて切除した十二指腸カルチノイドの1例

福井県立病院 消化器内科¹、外科²、臨床病理科³

○青柳 裕之、伊部 直之、有塚 敦志、濱本 愛子、内藤 慶英、林 宣明

波佐谷 兼慶、辰巳 靖¹

石山 泰寛、浅海 吉傑、宮永 太門² 海崎 泰治³

【目的】LECS(laparoscopy and endoscopy cooperative surgery)は全層性に病変が切除でき、適切な縫縮により穿孔や後出血のリスクが抑えられる治療法である。胃内病変であっても局注時に病変の視認性が低下し病変切除が困難となってしまうたり、十二指腸病変においては局注にて病変が埋没してしまうといった報告が認められる。今回、我々は8mmの十二指腸カルチノイドに対し局注を用いないでLECSを施行したLECS without injection にて治療した1例を経験したため報告する。

【方法と症例】症例は70歳代の男性。X線透視検査にて十二指腸隆起性病変を指摘され、上部消化管内視鏡検査にて十二指腸カルチノイドと診断された。当科受診しLECSが予定された。病変は粘膜下層を中心に存在し隆起部が乏しいため全周切開時に局注は施行せずに切開が施行された。その後、十二指腸肛門側より全層切開を経口内視鏡にて半周ほど施行し腹腔鏡下にソノサージを用いて病変を切除摘出した。

【成績】病理検査所見は Duodenal cancer, carcinoid tumor D, type 0-IIa, 8×7mm, SM,ly0(D2-40), V1,MIB1 index 1.3%にて(NET G1)で断端は陰性であった。術後第1病日に軽度の腹痛は認められたが貧血の進行、発熱は認められなかった。

【結論】十二指腸カルチノイドに対してLECS without injectionを施行した症例を経験した。胃内であっても高低差の少ない病変や、十二指腸カルチノイドのように腫瘍径は小さくても粘膜下層深層まで病変が存在する病変に対してLECS without injectionは有用であると考えられた。